
鬼神の蒼 慈愛の絆

夜鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼神の蒼 慈愛の緋

【Nコード】

N9588N

【作者名】

夜鴉

【あらすじ】

女神が世界を守る世界で、一つの悲劇の引き金が引かれていた。そして小さかった悲劇は、いつの間にか取り返しのつかないような悲劇となっていた。

そして悲劇は、三人と一人を苦しめ始めた……。

「話」過去「（前書き）」

決められた道を、人は運命だと呼びたがる

一話「過去」

世界を創ったと言う神は、気まぐれに世界を滅亡へと追いやった。人間は日々それに脅え、世界の片隅で静かに暮らすしかなかった。そして人間が一番怖れたものは、神の使いと言われるドラゴンだった。

ドラゴンは人間よりも遥かに高次の存在であり、神に一番近い種族だと信じられている。故に、神の意志に従う。

神は不良品、失敗作だと思っっている人間を殺してしまおうと考えた。だが、人間の繁殖力を侮っていた神は、まるで黽ごっこでもしているかのように、長い間続いていた。

そして、何も学ばない人間ではない。

幾年もの年月と犠牲を払い、人間は神から世界を“独立”させる方法を思い付いた。

独立、とは言ったものの、実のところ神の手から世界を“封印”したと言った方がいいだろう。そして、封印にはどうしてもその“元”となる存在が必要だった。

元、人柱に選ばれたのは、封印を考え出した神官の娘だった。

娘は気高い魂の持ち主で、自分の命で世界が救われるならば喜んで身を捧げたと言う。神官は涙を流しながら、自分の娘は“女神”と呼ぶに相応しいと言った。周囲もまた、その娘を女神と呼んだ。そして女神が封印の人柱となり、人間は初めて世界を歩いたと言う。

ドラゴンの姿も稀に目撃される程度になり、世界は人間にとって住みやすい環境へと変貌した。だが、問題はあった。魔物や、荒れた土地の開拓。問題は山のように存在していた。だがそれでも、人間は喜んだ。

それから何年の、何百年の月日が経っただろうか？

世界の片隅で縮こまっていた人間は、今や大地の覇権を手に入れ、地上の支配者だと豪語していた。

女神の封印と呼ばれるようになった封印は、名称の通り女性に受け継がれていた。女神となるには訓練と言ったものは必要なく、女神が死ぬと次の女神の素質がある女性へと、女神の証である“ガード”と呼ばれるものが身体の何処かに出現する。

女神に選ばれた女性は例外なく、神官と言う女神の世話役でもある人間の元へと連れていかれた。女神がいくら拒もつと、世界の為だと幽閉された。女神の封印は、まるで呪いのようだと女性達は嘆いた。

そしてある時、女神を殺そうと狙う集団が現れた。それが一体どこから出現したかは、分かっていない。

神官はその集団に対抗すべく、国々から兵を借り、軍を創設した。そして女神を狙う集団は、信徒の軍、信徒軍と呼ばれるようになった。

ここで一人の青年を紹介しておこう。青年はごく普通に暮らしていた。どこにでもあるような、普通の家庭に生まれ、育った。

上に兄がいて、下に妹。その真ん中に、青年がいた。兄と青年はよく似た顔立ちをしており、時々親も間違っ程だった。幸せな、家庭だった。

両親は叱る時には叱り、褒める時は褒めると、よく出来た人間だった。喧嘩もするが、それほど頻繁ではない。

父親は嗜み程度に剣術を習っており、青年と兄も同じように習っていた。

剣術は青年の方が相性が良かったらしく、目を見張る成長振りを

見せていた。

兄はどちらかと言うと頭がよく、妹に書物を読み聞かせては幼い妹に色んな知恵や世界を教えた。その兄のお陰か、妹は賢く育った。誰がどう見ても、幸せな家庭に見えた。だが、“幸せ”などと言うものは、唐突に失ってしまふものである。

信徒軍と女神を守る聖軍はの戦争が勃発していた。長年続いているその戦争は、今だ終止符は打たれていなかった。そして不幸にも青年の家族が暮らしている街に、信徒軍が攻め入ってきた。物質調達の為に攻め込んできたであろう信徒軍は、街の人間全てを殺戮してみせた。

青年と妹は、生き残っていた。それは運が良かったと言えるものだろう。

妹は兄の誕生日が近いので、花束を贈りたいと言った。そこで、剣の腕が立つ青年が同行したのだ。そしてその時、家に残っていた両親と兄は殺された。青年が戻ってきた時には、既に信徒軍は過ぎ去り、残ったのは死臭を放つ死体だけだった。

青年は呆然とした。妹は意識を失っていた。青年は当初一三歳と現状を理解するには少しばかり早い歳だったが、青年は理解していた。妹はまだ九歳であり、気を失うのは当然だろう。

青年は一人、父親が触るなど禁じていた呪いが纏わり付く大剣を手にとった。それは剣と言うにはあまりにも巨大で、無骨なものだった。

青年はそれだけを持ち出し、妹を抱えて何処かへと足を向かわせた。青年と妹は、ただ二人で生きる事を強いられた。

青年は、命を繋いでいた。歳は一九歳となり、妹は一五歳となっていた。

青年には友人ができていた。信用できる、親友と言っても過言ではないであろう友人だった。

友人は青年の一つ下ふあが、面倒見のいい青年だった。青年は友人に妹の世話を頼み、強盗やスリと言った職業をしていた。何度も危ない橋を渡った。時には殺人も犯した。全ては生きる為に、手段を選んでいるなどと言う悠長な事は出来なかった。

友人と妹は仲良くやっており、青年の知らないところで恋仲にはまで発展していた。青年は特にこれと言った反応はなかった。青年は友人を信用していたし、妹も友人を信頼していた。だから、結婚をすと言っても快く了承した。

そして青年、アイ二と妹であるジル、親友のイヴの前に悲劇が転がり落ちてきた。ジルの両肩に、女神の封印の証であるガードが出現したのだ。

ジルは泣き叫んだ。痛い、助けてと、泣き叫んでいた。イヴは貴重な鎮痛剤をジルに与えたが、それでも痛みは和らぐ事はなかった。アイ二はどうする事も出来ず、ただジルの痛みに悶える様を見るしかなかった。

そんなアイ二達の前に、突如聖軍が現れた。現神官であるエデオと言う老人に、数人の兵士がジルを引き取りに来たと言った。アイ二は素早い判断と行動で、イヴにジルを逃がせと指示を飛ばし、アイ二自身は既に扱い慣れた大剣を構えた。

兵士は冷笑を向けた。当たり前だ。アイ二の大剣は規格外に巨大なものだった。長さはアイ二の身長を悠々と越える。それをたかだか一九歳の青年が奮えるなど、一体誰が考えるだろうか？

日々の戦に疲れ、精神的にも摩耗した兵士は、アイ二に向けて脅しであろう刃を向けた。多くの信徒兵士を殺してきた剣だと言ってやれば、アイ二は鼻で笑ってみせた。

瞬間、兵士の怒号が響き、殺す為に刃を振り下ろす。それをアイ二は重心をずらすだけで躲し、舐めて掛かった兵士の脇腹に刃を滑り込ませる。そこで、他の兵士は驚愕に目を見開いた。

アイニはその大剣を、右手だけで振ってみせたのだ。その速度もさる事ながら、鎧の障害とも思わずに兵士の胸を分断した。

だが、それでもアイニは単身だった。神官であるエディオが拘束魔術をアイニに仕掛け、魔術と言ったものはからっきしのアイニなので、呆気ないまでに捕らえられてしまった。そして同じ頃に、イヴもジルも捕らえられた。

アイニはその時、エディオから宣告された。

「女神は連れていく」

そうエディオが短く告げ、アイニは憤慨したが、それでも動けないアイニに状況を覆す事は不可能だった。

その時、アイニは決意した。自らも聖軍に入ると。女神を、ジルを殺そうと目論む奴らを殺し尽くしてやると。イヴは婚約者を忘れて生きると言う選択肢も残っていた。だが、イヴもそこまで非情ではない。

そうしてアイニとイヴは、傭兵として聖軍へと招かれた。

これが悲劇の、苦痛で彩られた荊の道を選んだ瞬間なのだというのならば。これが運命だったと吐かしてみせるのなら、どれだけ世界は残酷に動いていくのだろうか？

「話」過去」（後書き）

前作、と言うか「Crimson Tragedy」と言う題名で書いていたのを書き換えました。

もし、前作を知っている方がいれば、今作もお付き合い願えればと思います。

ここまで読んで下さって、有難うございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9588n/>

鬼神の蒼 慈愛の緋

2010年10月8日13時58分発行